国分寺市のことをもっと知ろう　～歴史と民俗から～

新谷　尚紀

井澤市長　皆様こんにちは、市長の井澤です。今日は一月一三日で、午前中は成人式をけやきスポーツセンターで行いました。多くの若者が参加して、元気をもらってきました。そして午後は、歴史講演会に多くの皆様のご参加をいただき、誠にありがとうございます。「歴史と文化のまち」であります国分寺市では、市制施行六〇周年を機に、昨年六月から研究者と行政職員、市民協力員の四五名で市史編さん事業をスタートいたしました。今後も多くの市民と国分寺の歴史を一緒に学んでいき、そのなかから研究者を目指す方が育っていくとありがたいなと思っています。



挨拶をする井澤邦夫市長（当時）

本日はＮＨＫ番組の「チコちゃんに叱られる！」にご出演されています新谷尚紀先生をお招きし、民俗学の観点で市の歴史についてご講演をいただきます。講演会を通して国分寺市の歴史に一層興味を持っていただき、国分寺愛を育んでいただければありがたいなと思っております。ぜひ最後までお聞き下さいますようお願い申し上げ、冒頭のご挨拶とさせていただきます。本日はよろしくお願いいたします。

司会　市史編さん室の宮川と申します。僭越（せんえつ）ですが、私から新谷先生のご紹介をさせていただきます。

先生は昭和二三年（一九四八）に広島県でお生まれになりました。昭和四六年に早稲田大学を卒業後、大学院へ進学し、昭和六三年に「死・葬送・墓制をめぐる民俗学的研究」という学位論文で、慶應義塾大学より社会学博士の学位を取得されました。ご専門は民俗学ですが、

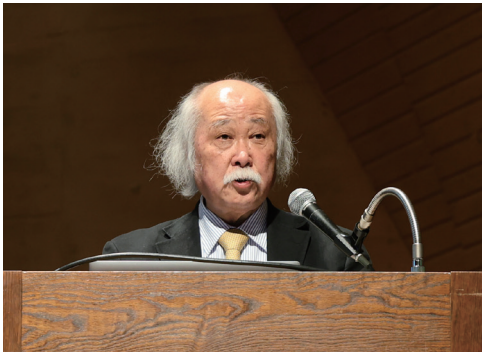
文献史学や考古学をはじめ多くの学問分野にまたがった学際的な研究に携わっておられます。現在は国立歴史民俗博物館及び国立総合研究大学院大学の名誉教授でございます。本年三月には、民俗学・歴史学そして考古学の垣根を越えて通史を叙述した『政治の米・経済の米・文化の米　稲と米で読む日本史』が刊行予定です。ＮＨＫ番組の「チコちゃんに叱られる！」では親しみやすい語り口で、日常のふとした行為に込められた意味を分かりやすく解説されています。

本日は「国分寺市のことをもっと知ろう～歴史と民俗から～」と題し、皆様にとって一番身近な地域の歴史を様々な視点からお話しいただきます。それではよろしくお願いいたします。

新谷　国分寺市がどんなにすばらしい街か、ということを知ると面白い、面白いともっと知りたくなる。そんなお話を本日はしてみたいと思います。

一．人生はつながりの中に

人間は大体三万日で死にます。長生きしてもです。人の寿命を大体八〇年とすると、三六五×八〇＋閏年二〇回とで約二九，〇四〇日です。人の一生は短いのです。私は昭和二三年（一九四八）生まれですので軍隊に徴兵はされませんでしたが、親の世代は兵隊に取られ、多くの若者は死んでしまいました。考えてみると確かに飛行機に乗って亡くなった方々というのは、パイロットになれるぐらいの知識と技術を持っていた人たちです。それがむざむざと死んでいったのですね。その人たちを見ながら生存した我々の上の世代は、とにかく戦争はいけない、と言っていたけれども、最近はなんだか危なっかしくなってきていますね。人を煽（あお）って自分は生き延びる、そんな人たちがいたことを、歴史を学ぶ中で、私はかなり知っています。どんな混乱の時代にも、フェアネス＝公正性という言葉の重さが共



新谷尚紀氏

有される必要があると思います。

何を言いたいのかというと、人間は元気でも、やがて衰えて死んでいきます。すると、一体生まれて何が良かったのだろう、良いこと悪いことを考えますと、大体悪いことが多いのですが、昔の人たちは自分の生きているうちに子どもや孫の世代に、少しでも役に立つことを残しておいてやりたいと考えていたようなのです。「桃クリ三年、カキ八年」などといわれるように、江戸・明治時代の人たちはよく果樹を植えました。でも、決して自分の子どもや孫たちのためだけではありません。水が不足した多摩の台地や丘陵に水を通した、江戸時代前期の玉川兄弟、中期の川崎平右衛門など、世のため人のために、その生涯をかけた人たちもいました。関東平野の生活を豊かにしていったのは、伊奈忠次とその子伊奈忠治父子でした。もちろん、一緒に汗水流した、名も残されない多くの協力者、参加者がいました。そんな昔の人たちのことを、今日は少し考えてみたいと思います。

二．民俗学は民俗伝承学：新しい歴史学

民俗学は柳田國男が作った日本の学問です。フォークロアとよくいわれますが、そうではなく、フランス語で tradition populaire：トラディシオン・ポピュレールといって、民間伝承を研究する学問です。生活の中の伝承されるものと、変遷していくもの、tradition トラディシオンと transition トランディシオン、そういう見方で歴史を考えようという学問です。そういった柳田國男の考えを一人だけ理解できた方がいました。折口信夫です。ほかの人は全く理解できない、分かったつもりになるけれど、結局、民俗学はフォークロアでしょう、と片付けてしまっています。「フォーク」というのはフォークソングとか、要するに民間のとか、庶民のことですね。「ロア」というのは知恵とか技という意味です。「庶民の

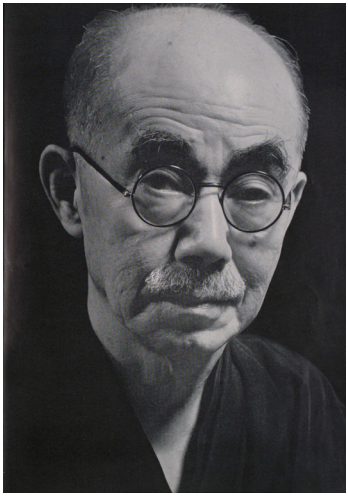


図１　柳田國男
（出典：国立国会図書館
「近代日本人の肖像」）

知恵」のことです。それを研究しようとして、イギリスで一九世紀の後半、産業革命で世の中が変わっていく中で、起こった学問でした。カルチャー＝文化というのはハイソサエティ＝上流階級しか持っていない、レベルの高い人たちだけがカルチャーを持っている。例えば、ベルサイユ宮殿を作って、その中に絵を飾って、シャンパンを飲んでいる人たちです。地べたで働いているフォーク＝庶民には、生活があるだけという考え方が西ヨーロッパでは強かったのです。階級的な社会を当たり前と思っている人たちが、西ヨーロッパの近代を引っ張ってきた。だから、フォーク＝庶民なんかにカルチャー＝文化なんかあるわけないと、そう思っていたのです。しかし、産業革命が進展して古くからのものが失われていく中で、それにだんだん疑問に持つ人たちが出てきて、イギリスではフォークロアが生まれました。けれども、それは学問になりませんでした。やはり論理がないからです。事実を分類整理してみるだけでは趣味のレベルであり、そこに何らかの論理を見つけ出さなければ学問ではない。そこで結局はソーシャルアンソロポロジー（社会人類学）に吸収されていき、フォークロアという学問は消えていったのです。

それに対して、フランスでは「ソシオロジエ（社会学）」という理論の強い学問が出来ました。ですから、フォークロアというのは、イギリスでもフランスでももう学問ではないのです。それなのに日本では、フォークロアをそのまま使って、文化人類学や社会学とどこが違うのか、それをはっきり説明しない大学教授もたくさんいます。困ったものです。民俗学とは何か、それは生活の中の慣習や伝説などの民間伝承を資料として、日々の生活の中の変わりにくい部分と変わってしまう部分とを含めて、私たちの生活の歴史を明らかにしていこうという歴史学の一つなのです。

何が言いたいかというと、柳田國男や折口信夫など、亡くなった人たちの思いは文字で残っています。だから、その論文を読んでみれば「あっ、こういうこと言ってたのか、それなのに、誰も理解できなかったのか、それがあの頃だったんだな」ということが分かります。でも、学問として成長できなかったのはなぜか、というと、「民間の変なしきたりとか、風俗習慣はどうせいいかげんなもんだよ」と思う人たちばかりが日本のアカデミズムを

リードしてきたからなんです。ただし、そういう大勢の中で、古代史研究者の井上光貞先生は文献の歴史学も大事だが、それだけでは足りない、人類の歴史は様々な比較文化の視点で研究する必要がある、今で言う「人文知」とか「総合知」という考え方に立って、文献歴史学も考古学や民俗学との学際協業を目指す必要がある、そのために一つの歴史研究機関として博物館を作ろうということで、千葉県佐倉市に国立歴史民俗博物館が作られたのです。井上光貞先生には、柳田國男の民俗学が歴史学の一つであるということがよく理解されていたのです。ありがたいことに、私はその学際的な共同研究を進める場に約二〇年ほど勤めることができました。

三、なぜ？ほんとう？という疑問から

さて、国分寺市はどうしてこの名前なのかというところから始めましょう。武蔵国分寺と尼寺があったという歴史があります。では、なぜ国分寺があったのかというと、そこにたくさんの資金・資財・ファンドをつぎ込んだ天皇と皇后がいたからです。聖武天皇と光明子です。

聖武天皇と光明子は、歴史の教科書ではすごく立派な人と言われますけれど、歴史をよく見てみると古代の律令国家を壊していった二人でもあります。何故そんなことが言えるのかというと、藤原不比等（ふじわらのふひと）らが中心となって完璧な収税システムを作り、農民から税を取りたてる律令国家の体制を作りました。そうして山上憶良（やまのうえのおくら）が「貧窮問答歌（ひんきゅうもんどうか）」の中で「世間（よのなか）を憂しとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば」と詠うほど、農民たちからその生産物を搾り取ったわけです。その代わりに、全国から租税という名の資財・ファンドが平城宮に集まった。それをセントリシティ＝centricity：中心吸収性とリディストリビューション＝redistribution：再分配と言うのですけれども、権力とは中央に税を集め、思うように分配してやる、再分配。これが権力の機能です。フランスのカール・ポランニーという人が、権力は何か、それは中心制と再分配の仕組みだと言っています。律令国家はそうやって集まってくる資金・資財で、全国に国分寺・尼寺を作ったのです。すごくお金がかかった。その頃、今のコロナよりもっと怖い天然痘が大流行していたので、天皇と皇后は都を逃げて逃げて逃げまくった、それが紫香楽京（しがらきのみや）や恭仁京（くにきょう）だったのです。それらの膨大な

財政負担による赤字補填のために、やがて公廨稲（くがいとう）という特別な重税を課していき、結局、律令財政を破綻させていったのです。

歴史はそうして常に変化の中にある。でも、変化しながらも伊勢神宮は今もあるし、出雲大社もある。つまり変化の中にこれを残さなければ、と思うしきたりとか風俗習慣があるのです。それは何かというと、自分たちの存在証明だからです。それがなくなったら自分たちが先祖代々の歴史、先人たちからつながっているこの社会で、どこにいるのか分からなくなってしまうという不安があるからです。ですから、書かれた歴史は非常に重要だし貴重であり、また発掘された遺跡や遺物も貴重だけれども、その他にも例えば恋ヶ窪の伝説ってありますね。本当かどうかわからないけれど、畠山重忠（はたけやましげただ）と美しい女性が仲よくなっちゃった。そんな話なんか、普通歴史学とか考古学を学んでいる人たちからすれば研究対象とはしません。しかし、民俗学というのは、そのような伝説について、その過去と現在と未来の変遷と伝承のダイナミズム、動態、これを読み取ろうとします。その伝説はいったい何をいいたいのか、を考えます。それが柳田とか折口の民俗学でした。私が学生の頃は、大学に専門の民俗学の講座はなく、ただ一般教養の科目に一つあるだけでした。何故ないかというと、日本の大学制度が、東京帝国大学をはじめ、全部イギリス、フランス、ドイツの西洋の学問体系を輸入して真似して作ったものだからです。西洋にない学問は大学の講座には作れないのです。そうした中で、井上光貞先生は、民俗学も含めて、国立大学並みの文部教官のポストを、教授・助教授・助手の枠で四つの研究分野に五〇人以上も作りました。そこへ私は呼ばれまして考古学、歴史学の先生たちと共同研究をすることができました。

四. 国分寺と水の恵み

民俗学からみれば、例えば姿見の池の伝説、あの説話はすごく意味があります。西元町に真姿（ますがた）の池がありますね。あと、恋ヶ窪の姿見の池。国分寺にはそういう水に関係する場所があちこちにあるというところがとても大事です。だから、この会場が「いずみホール」というのも何か偶然かもしれませんが、国分寺のキーワードといえば、「水」なのです。真姿の池といえば、薬師（やくし）堂の



図２　真姿の池（西元町一丁目）

薬師如来（にょらい）の霊験を語る伝説があります（図２）。それは重い病気になった若い女性が、この薬師様にお祈りするのですね。そうすると小さな子どもが現れて「この池で洗いなさい」と言われ、洗ってしばらく経つと、みるみるうちに元の美しい女性に戻ったというような霊験、霊的なすごい奇跡を語るものです。その病気は昔は不治の病とされていて、症状が進行すると顔や手足に運動障害や変形があらわれるので、人類共通で非常に怖がられていた病気でした。だからキリスト教関係の信仰の奇跡としても、それを治してくれる神様という形でよく出てきます。

こういう場合、民俗学ではどう考えるかというと、個別の意味を考えると同時に、よく似たものをたくさん集めてみる。例えば、キリスト教であれば神の霊験、スピリチュアルパワー、ご利益（りやく）を説明する、そして人々の絶望を救ってもらえる、そういう役割がこの話にはあるのです。次に、伝説の構成要素に注目してみると、池、それから仏、仏がキリストでも、あるいは何かの神でも何でもいいのです。話の枠組みは同じでも、それを構成している要素が、各地の伝説を比べてみれば入れ替わっています。池はどちらかというときれいな水です。きれいな水が湧くところには必ず美女の話が出てきます。

各地の水の伝承を見てみると、まずは美女と子ども。姿見の池の場合では、畠山重忠という要素が入っていますね。なぜ畠山重忠という要素が入るかというと、当然、東山道武蔵路（とうさんどうむさしみち）、鎌倉街道、府中街道、現在は武蔵野線、ここは多摩地区のいわば交通の要衝、センターだったからです。鎌倉幕府ができる頃に、実際に畠山重忠たちがこの地を通っていた、国分寺はそういう場所なのです。

この説話に、畠山重忠という要素が入っているのは、この地域の歴史がその背景にあるからです。古代の律令国家の頃から平安時代、そして鎌倉時代へかけて、東山道武蔵路や鎌倉街道というのは、今で言えば、新幹線の東京―新大阪間の主要な駅、というぐらいのところです。

その重要な位置にこの国分寺はあった。ただ、鎌倉幕府が滅びる頃に、残念ながら武蔵国分寺は焼けてしまいます。でもそうなっても、それにまつわる伝承が残っています。真姿の池、姿見の池、恋ヶ窪とか。そこに記録された歴史は、歴史学が研究するとよいのですが、残念ながら確かな記録が少ない。そこで、記録はなくても、記憶がある。その細かい内容は不確かだけれども、忘れられないことだ、といって語り継がれた歴史がある、それを民俗学、民俗伝承学は研究対象として分析するのです。

民俗伝承や民俗信仰や説話の類いに対しては、各地に共通している「構成枠組み」と「構成要素」という視点で分析します。一定の歴史的な背景がある事柄だからです。歴史的に何かがあった場所には、どこに行ってもよく池があるのです。ただ、その伝承の中での要素は若い美女とは限りません。姥（うば）が池（いけ）などといって、お婆さんだったりします。でも男性では駄目です。人間はみんな女性の胎内から生まれてきますから、母性の中に霊性を感じるようなのです。お婆さんでもいいのです。どうして姥が池かというと、お婆さんが飛び込んで死んだという話が多い。例えば、佐倉の国立歴史民俗博物館の敷地内に姥が池という池があります。それはだいたい悪いやつがいて、ある女性がその犠牲になって死んだ。だから供養をしなければいけないという話になっています。

この国分寺の西元町の真姿の池には、必ずしも供養ということは強調されていません。なぜなら、不治の病から薬師様が美しい女性を救ってくださった霊験を語るものだからです。一方、恋ヶ窪の姿見の池は微妙です（図3）。その姿見の池の伝説は今も地元の東福寺さんが記念碑を建てるなどして、この地の歴史と記憶として伝えようとしておられます。この伝説については、実は市史編さん室長の依田亮一さんの立派な研究成果があります（依田亮一「国分寺の畠山重忠伝承―恋ヶ窪の地名由来を考える―」二〇二四年度 第四二回市民大学講座）。だから、私がここでいろいろいうのもおこがましいのですが、要点をいえば次のとおりです。勇猛果敢で清廉潔白、源頼朝の最も信頼の厚かった鎌倉武士の典型である畠山重忠、当時は大勢の人が行きかいにぎわう宿場町の恋ヶ窪、そのいわばトップスターの傾城（けいせい）、遊女の夙妻太夫（あさづまだゆう）、その二人の悲しい恋の物語です。中世の傾城とか遊女というのは一流の女性文化人であり、江戸時代の遊女というイ

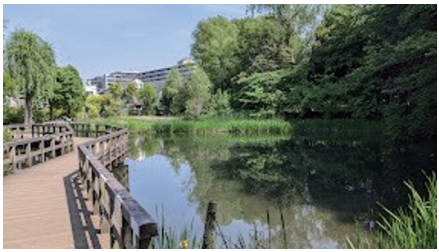


図３　姿見の池（西恋ヶ窪一丁目）

メージとはまったく違います。現在でいえば人気を誇るトップクラスの女性芸能人というようなイメージでしょう。その二人は相思相愛で、かたく結ばれていた仲でしたが、平家討伐のためにただ一時（ひととき）の別れということで、重忠は再会を約して出陣しました。その帰りを待ちわびる太夫、そこに横恋慕した男が重忠の戦死という嘘（うそ）をつく、悲しみのあまりに太夫は池に身を投げます。無事に帰還した重忠はその太夫の死を知ると、深い悲しみの中で、太夫の供養のために寺院を建立し、金銅の阿弥陀仏を安置して菩提（ぼだい）を弔いました。その後、畠山重忠自身も源頼朝の急死の後、北条時政と政子と義時の卑劣な謀略によって一族もろとも滅ぼされてしまいました。「こんなひどいことなど、忘れられてなるものか」というような気持になった人が多かったのでしょう。

ですから、日本各地の池をめぐって、どんな言い伝えがあるかというのを調べてリストアップしてみて、それぞれで語られている説話の「構成枠組み」と「構成要素」とを整理するといいのです。構成要素とは、それぞれの地域の歴史的な事件や人物が組み込まれています。その語られている事件や人物がそのまま歴史的な事実というわけではありませんが、人びとの記憶の中に語り伝えられつづけてきた、それだけ重要な印象を残している事件、人物だと考えられます。一方、共通している構成枠組みというのは、説話のいわば保育器、乳母車（うばぐるま）、おんぶや抱っこの柔らか布団のようなものです。それはどんな歴史の要素でも組み込んで保存してくれる、そんな歴史の記憶の保存装置です。人生に限りがあると知った人間にとって、自分につながる先人たちの歴史に思いを馳（は）せることが、第一の精神的な安らぎであり、そのような保安装置が必要とされてきているのです。これはやっぱり覚えておこう！みんながそう思った歴史は、伝説や説話という形で語り継がれているのです。先の依田さんの第四二回市民大学講座の資料には伝承過程の追跡整理も丁寧になされており貴重なものなので、市民向けにまた講座が開かれて市民共有の知財になるといいなと思います。

五．ふるさととは何か

では、民俗学で国分寺市を見てみるとどうでしょう。国分寺市のことを知って、ここで生まれた人、ここで育った人、ここで仕事をした人、あるいはここに何年か暮らした人、死ぬまで暮らした人でも、やはり、ここはその人たちにとってふるさとになります。

私は広島県の山の中で育ったのですけれども、昭和四二年（一九六七）に東京の大学に出てきた頃はもう高度経済成長の真っただ中でした。中学生の頃に東京オリンピックでした。この辺の人口も急速に変わったのですね。そのビフォアー国分寺がある、アフターがある、その途中もあるということになりますね。

だいたい私たちの世代以前は、先祖代々が何とか村の何とかの田んぼを耕して農家をしていたとか、檀家寺はこのお寺とか決まっていたのです。それはだいたい江戸時代の享保の改革以降の農村振興策の結果でした。ところが、それが崩れてきているのが今の我々の世代です。生まれたところと育ったところとはどんどん変わっていきました。江戸時代中期から昭和戦前期までは、生まれたところで育つ人が多かったのです。それが、「俺はこんな村、嫌だ」って歌を歌った吉幾三さんみたいに、田舎から東京へ出てきた人たちが、昭和三〇年代から四〇年代には非常に増えました。それまでの農林水産業中心から新しい重化学工業中心へという産業構造の大きな変化によってです。昭和三〇年の神武景気から四八年の第一次オイルショックまでを、毎年一〇％程度の成長率を続けたことから、経済史学では「高度経済成長期」と呼んでいます。その頃、都市部に集まってきた人たちの場合は、やはり田舎の親のめんどうを見よう、墓を守ろうと帰っていった例も多くありました。明治・大正期にも、近代化の中で都市部に出て来る人たちも多くいましたが、その頃は「うさぎ追いしかの山」とか、「身を立て名をあげ　やよ励めよ」と歌われたように、東京や大阪などの大都市に出ても、ふるさとを想いながら、ひと働きして業績を上げて立身出世をして、田舎に錦を飾るというのが昔の合言葉でした。ところが、戦後の高度経済成長期を過ぎる頃になると、帰った田舎は大きく様変わりしてしまい、ほとんど浦島太郎状態になっていきました。今もそれが急速に進んでいます。農村の過疎化は今

も進んでおり、若い人たちは都市部に生活の場を求めていきます。民俗学を学んでいると、日本各地の調査をしますが、私が二〇歳代に調査に行った村が、七〇歳代の今再び訪れると、大きく様子が変わっているのです。

この国分寺市は今では立派なまちになりましたが、明治生まれの人たちは、米はほとんど食べていませんでした。中央線沿いの杉並区の荻窪、阿佐ヶ谷、永福町、吉祥寺は武蔵野市ですが、あの辺りの明治生まれの人たちに、若い頃どんなものを食べていたかを瀬川清子さんという民俗学者が調査をしています（瀬川清子『食生活の歴史』講談社 一九五六）。柳田國男の下で民俗学を学んだ人で、最後は大妻女子大学の教授でした。その瀬川先生が杉並区辺りの中央線沿いの古老たちに、昔の食事と生活について聞いたら、アワとかヒエしか食えなかったと。お正月だけ白い御飯が食べられた。だけど、その他には、白い御飯が食べられるのはいつかというと、人が死んだとき、葬式です、あとは結婚式、そんなもんだったという話を聞いています。だから、今回私が書いた『政治の米・経済の米・文化の米　稲と米で読む日本史』（山川出版社 二〇一五）という本では、社会を動かすのは経済であり、その中心は資本・資財・資金である、日本ではそれが長い歴史の中で米だったと書いています。租・庸・調も年貢米も地租という税金もみんな稲と米が中心だった。小判も米俵の形だった。つまり、稲と米が貴重なマネーだったのです。今で言えばファンドです。資本・資金が米あるいは稲だったのです。それは貴重品だから、ほとんど納税や物品購入費にまわされて、普段の生活では食べられなかったのです。

その古老たちが瀬川先生に語ったのは、「私たちはそれで一年中ずっと苦労して育ったんだけど、今の孫たちは『アワとかキビとかヒエとか、それを食べてたんだよ』って言ったら、『何だ、おばあちゃん、それ鳥の餌じゃないか』って言われた」と笑っていたそうです。確かに我々の生活を考えてみても、子どもの頃の日本ではもうありません。

それでも、杉並区も国分寺市もみんな今もあります。ただあるように見えるけれども、随分変わってきている、そしてよく見てみると、今も移り変わりつづけています。そのような生活の変遷と伝承という点から歴史を見ていこうとする学問からは、何が見えるのかというと、昔と、

途中の変化と、今とが見える。今が見えると同時に未来が見えるのです。私は広島県の山間地農村から昭和四二年に東京に出てきて、渋谷区から小平市、東久留米市へ、そして昭島市に小さな家を建てて、もう五〇年以上住んでおります。七〇歳代後半になりましたので、知り合いの地元の昭島のお寺の住職様に受け入れていただいて、墓地に先祖代々の石塔も建てました。その墓地は多摩川の河岸段丘の上に位置しています。だから、丹沢山系の大山から甲斐の富士山や、奥多摩の山々までみんな見渡されるのです。まあ、死んだら見えないと思いますが、この多摩地域が私にとって、広島県の山間農村というふるさととともにもう一つのふるさととなっているのです。そして、この地が終の棲家（笑）ということになるのです。やはり昔の人も、みんないつかは死ぬと思っていました。あの在原業平が詠っているように、「つついに行く　道とはかねて聞きしかど　昨日今日とは思はざりしを」というような人も多かったでしょう。

六、多摩地域の崖線と水利

話題を変えて、国分寺市はどういうところか、そこから見てみましょう。南に多摩川があり、その北方に沖積地が広がり、そこから徐々に上がってきます。JR中央線に乗って外を見ると、立川から国立までは平べった、西国分寺に着くと丘の下を掘り下げて駅をつくっています。さらに東へ行くと国分寺崖線があって、線路から南のへ谷が伸びていて野川が流れています。国分寺崖線の崖下から水が出てくるこの豊かさが、国分寺を作ってきました。今の国分寺というより古代の国分寺の寺、あそこはとても水利のいいところです。歴史の由緒もあり、薬師様もある。崖線を下りれば真姿の池。そこにホタルがいます。皆さんが頑張って保護しておられます。

ホタルといえば、私たちの田舎ではホタルはずっといたのです。ところが、高度経済成長期、昭和三〇～四〇年代ぐらいでしたね。ニカメイチュウなどという稲の害虫がすごく流行ったのです。そうしたらヘリコプターがやってきて、上空からぶわっと大量の農薬をまいて駆除していきました。あれでホタルが全滅しました。私の小学校の頃の思い出です。それから二度とホタルは出てきませんでした。だから、もしホタルの環境を復活させるのなら、一生懸命きれいな水にしなきゃダメです。そう

いう、小さな環境変化はあまり歴史の教科書には出てきません。でも大事な歴史の一コマです。水があるところが人間の生活が安定しているところ。ただ水も出過ぎると洪水で危ないですね。多摩川流域では何回も洪水の被害があったことが江戸時代から記録されています。集落ごと台地の上に移住した例もあります。

国分寺は何がいいかというと、台地もある、谷間もある、崖下で水も湧く、人間の歴史もある、そして東山道武蔵路という北と南を結ぶ古代から中世につづく幹線道路が走っていた、そんな場所なのですね。古代の奈良時代、平安時代もそうだし、鎌倉時代も主要な街道沿いだったのです。ですから、時代を超えて、やはり土地を選ぶときには今の武蔵野線もその筋を通って所沢に向けて通していますね。府中街道もそうですね。

国分寺市には『国分寺市史』というすばらしい本があります。増田四郎という一橋大学の西洋史の偉い先生が監修され、優秀な専門分野の先生方が集まって刊行された立派な本です。本編以外にも地元の先生方が調査研究の成果を丁寧に書いておられる参考資料もいろいろと刊行されていますので、ぜひ読んでみてください。

七、水と人と財と道

この国分寺には古くから多くの人が住んできました。多摩蘭坂（たまらんざか）遺跡、今の内藤二丁目あたりですが、旧石器時

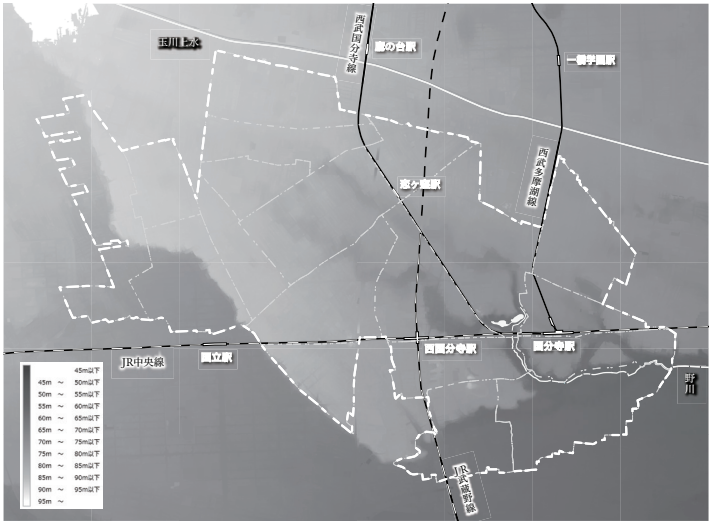


図４　国分寺市域の地形と高低差（地理院地図に加筆）

代の遺跡が発掘されています。縄文時代には多喜窪遺跡が有名です。「窪」という水利を思わせる地名で、そこから芸術的な縄文土器が出てきています。

日立製作所の中央研究所に野川の水源が守られています。なぜ野川の水源があの研究所の敷地の中にあるかというと、第一次世界大戦で大変景気が良かったときに、大金持ちが別荘として目をつけたからです。大正～昭和の初期には、このあたりが格好の別荘地だったのです。別荘はだいたいどういうところに作るかというと、水があって風光明媚で、環境のいいところです。杉並区でも近衛文麿の邸宅がありますよね。井伏鱒二はあんまりお金はなかったでしょうが、荻窪に家を作って住んでいますね。三菱とか満鉄といった超大財閥は、国分寺に広大な土地を求めて手に入れていたのです。それはまた後でご説明しますね。

さて、古代の話ですが、律令国家の体制ができますと、今の府中市と国分寺市のエリアに武蔵国の国府と国分寺が作られます。平城京から伸びて来た東山道が上野国、今の群馬県にあった新田という駅から分岐して、南方の武蔵国府まで、東山道の分岐路である武蔵路が通っていました（図5）。つまり平城京の役人たちが上野国から武蔵国へとやってくるメインルートだったのです。それが、奈良時代の終わり頃、武蔵国は東海道の諸国の中に組み入れられます。でも、東海道の道のりはつらくて、大井駅から豊島駅へ、そして荒川を渡って下総国の国府に至るのは大変でした。西の方で渡るのが大変なところといえば、名古屋の木曽川・揖斐川・長良川ですよね。熱田神宮のところで船に乗って三重県の桑名に行くしかなかった。現在の高速道路や新幹線のような直線的な渡り方は絶対に無理でした。だから、大きな川があるとそこは通れなかったのが古代です。

この東山道武蔵路というのはどんな道だったかというと、とにかく幅が一二mもあって広いのです。そして、利根川を熊谷市の妻沼あたりで無理やりがんばって船で南に渡ったとしますと、最初は妻沼が一つの駅です。その次がどこだろうと見てみると、ちょうど八〇kmずつを五つの駅でつなぎますので、妻沼、吉見百穴の辺り。市野川を渡る辺りですね。それから入間郡に入ってきて、霞が関。霞が関というのは、川越の近くに東武東上線の駅が今もあるのですが、そこです。やはり大きな

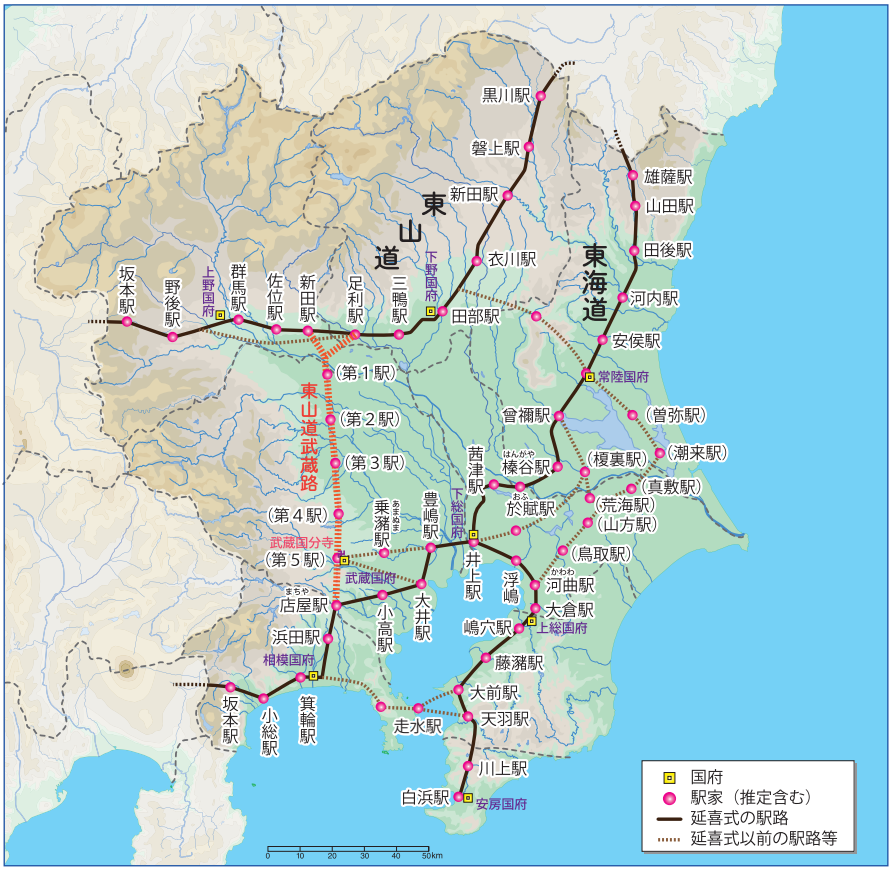


図５　武蔵国周辺の古代道路（推定）
（出典：『古代道路を掘る―東山道武蔵路の調査成果と保存活用―　―改訂版―』
国分寺市教育委員会、2023 年）

川が霞を立てていたことからの地名のようですね。そして、そこの八幡前に若宮遺跡があります。それから東の上遺跡、所沢ですね。それから府中にやってくる。所沢と府中を結ぶ道の途中がこの辺りの恋ヶ窪なのですね。

児玉郡、今の本庄市の遺跡から木簡が出てきた。そこには、檜前部の女性が四〇束も出挙の米を納めたと書いてあります。農民が生産し納めた穀物をゲットした当時の税務署の役人は、大伴国足と書いてあります。武蔵国の水田地帯で取れた米を、財源・ファンドとして、どこへ送ったかというと、奈良の薬師寺に送ったという

のです。腹立ちませんか、武蔵の米を薬師寺の運営資金にしていたんですね。お坊さんたちが食べていたのかもしれませんね（笑）。そういう中でだんだんと現地で生産している資財・ファンドを、やすやすと国や役人に収めたくない、もし欲しいなら取りに来いよということで武装した連中が各地に出てきます。それが武士団です。武士たちは稲米（とうまい）という大切な資財・ファンドは自分たちの目の前で収穫されているのだから、冗談じゃない、欲しかったら取りに来いよと思っていたでしょうが、それぞれの土地と農民の領有権を認めるというシステム、仕組みが中央の朝廷と摂関家に握られており、なかなかそれが言えなかったのでした。しかし、それが動揺してきたのが、一〇世紀半ばの平将門（たいらのまさかど）の乱とか藤原純友（ふじわらのすみとも）の乱の時代でした。彼らは一族郎党を率いて武装した集団でしたから、互いの利害対立の中で血みどろの戦闘を繰り返したのでした。そうして、やがて武家政権ができていくことになりました。武蔵国分寺もファンドが十分集まらない時代になり、経営は苦しくなりました。そして、鎌倉時代の末期には新田義貞の軍勢が鎌倉街道沿いに南下して、分倍河原（ぶばいがわら）、関戸（せきど）と攻め登ります。そのときこの恋ヶ窪、このメインルートを軍勢が通る、軍勢が通るということは悲劇なのですよ。資財をみんな略奪されますからね。だから、みんな逃げるのです。だって、食い物があれば取られますし、兵士たちというのは要するに強盗集団でもあるのです。教科書やテレビドラマで劇的に描かれる武士の歴史も、実際にリアルに見ていくと、悲惨な略奪の歴史です。でも、それが社会を変えていった動きでもありました。戦乱が終われば、新しい秩序がもたらされました。

八．先人たちの人生への想像力がいまの生きる元気に

国分寺の歴史をしっかりと確認しておこうとして、行政が地域の歴史を明らかにしようとするのが市史編さん事業です。「今の自分には、あまり関係ない」と思う人もいるかもしれません。しかし、それはちょっともったいない考え方です。今、自分がここに生きていることへの感謝を考えてみてはどうでしょうか。この国分寺市の一帯には古代から現代まで、たくさんの人たちが生きてきて、そして死んでいきました。府中街道もそれができた頃、その同じところで、一生懸命働いた一人ひとり僅

かな人生をだいじにして、生きていた人たちがいたのです。それぞれの土地と歴史には、先人たちの人生の蓄積があるということを考えてみてはどうでしょうか。過去・現在・未来を考えながら生きている、それが人間です。

だから、考古学者で古墳時代が専門の広瀬和雄先生は、古墳がなぜ面白いかというと、かつてこんな人生を賭けた人たちがいた、その記念碑ですよ、と言っていますね。すると逆にここはただの原野ではなく、たくさんの人が努力を傾けてきた村ですよ、そんな村に今の私たちは住んでいるのですよ、ということです。歴史のあるまちというのは、そこにどれだけの悲喜こもごも、たくさんの人が人生をにおいていたか、その歴史の重みを感じることができます。それが歴史を知る意味であり、楽しみなのです。だから、ぜひ市内を散歩してみるといいと思います。こんな豊かな歴史が刻まれているまちは日本各地でもなかなかないのですよ。

ところで、武蔵国分寺の遺物に、古代の瓦があるでしょう。あの文字瓦です。その瓦を焼いたのはどこかというと、その一つが比企郡鳩山町の窯です。その歴史に学んで、国分寺市と鳩山町では古代に瓦を運んできていたことを記念して、連携してイベントをやっていましたね。そうです。歴史はただ学ぶだけのものではなくて、活用できる現代の資源でもあります。一人の人間には二人の親がいます。その二人の親がいれば、それぞれの親がいるから、四人のおじいちゃん、おばあちゃんがいます。それにまた二人の親がいるから、一六人のおじいさん、おばあさんがいます。もっとさかのぼれば、三二人。さらにその二乗、その二乗と、先祖というのはいっぱいいるんです。その中のどの人の遺伝子が自分の中に伝わっているかと思うと、おもしろいですね。腹立ちっぽい人はあのおばあさんから、いやあのおじいさんから来たな、と思えばいいのですね。ですから、先祖代々なんていうのは、大勢の集団を含めたものであり、当主だけの一系というのは作り上げたイメージにすぎません。

口幅ったい言い方ですが、今の天皇家も、神武天皇以来とか、天武・持統天皇以来といわれますけれど、濃い血縁的な関係からいえば、室町時代の正長年間に、足利将軍も空位であった頃、『看聞御記』という大変おもしろい日記を書き残した伏見宮貞成親王の第一皇子、後花園天皇が先の後小松上皇の猶子となって、まだ少年の

一〇歳で皇位を継いでから皇統は変わって、現代へとつながっています。ですから、南北朝時代の有名な後醍醐天皇とは血縁的にはそれほど濃い関係にはありません。

私は『伊勢神宮と出雲大社―「日本」と「天皇」の誕生―』（講談社学術文庫　二〇二〇）という本を書いて、日本の歴史と文化について民俗学と歴史学の観点から、伊勢神宮や出雲大社がどのように作られたか、古代の国家や天皇がどのような歴史を歩んできたのかについて研究した成果を発表しています。そのもとになった佐倉の国立歴史民俗博物館での、「日本の神々と祭り―神社とは何か？」という共同研究のテーマに関する展示を行なったとき、平成一八年（二〇〇六）四月に、今上天皇が皇太子殿下の頃でしたが、その見学に来られました。そのとき、「新谷さん、いつも新聞の記事楽しみにしていますよ」と声をかけられました。神社ではなぜ柏手を打つのかなど、身近な疑問についての解説を新聞に書いていたのを読んでおられたのですね。「うれしいな」と思いましたが、心優しいリップサービスだったのかもしれません。展示の解説をしていて少し会話がはずみ、知的な、感じのいい立派な人だなと思いました。学習院大学では学生のころ、安田元久という中世史の先生のゼミの所属で、日本中世の運輸交通の歴史の研究をされており、イギリス留学の頃はテームズ川の水運について研究をされたとのことですが、その同じゼミに、私がかつて共立女子第二高校の教師だった頃の教え子がいて、殿下はとてもまじめなすばらしい方だといっていました。その通りでした。

さて、武蔵国分寺が焼けてしまって歴史の中からは長いあいだ外れていたけれども、昭和五七年（一九八二）に、東山道武蔵路の発掘調査で観音様の銅製の仏像が出てきました。これはなかなか立派なもので貴重です。専門の先生たちが調べたら武蔵国で作ったと、奈良から持ってきたものじゃないっていうことです。それだけの技術がこの地にはあったのですね。

九．清水と伝説

先ほど言いました真姿の池には、弁財天社があり、これもよく残っている。それは、本多さんというあの辺の古いお家の方が、自分のお屋敷の中でしっかりと守ってきたからです。この地区で自分たちの神さまとして、先祖代々大事にされてきているのですね。弁財天社といえ

ば、今年は巳年、蛇の連想がありますね。お金が貯まるのです。多くの日本人はそう考えていますね。古代ローマの時代でも、現代の一橋大学でも、商業の神様は蛇のマークでしょう。だから人類共通に、どうも蛇には豊かな財力、経済力というのを考えさせられる。それは、稲米・財力・水です。天照大神は太陽の神ですが、その弟神はスサノオノミコトですよね。太陽だけだと日照りになり、稲も枯れます。そこで必要なのが水です。水の神が誰か、それは『古事記』や『日本書紀』の神話ではスサノオノミコトです。でも、水は洪水も起こすし、恩恵と災禍の両方を秘めている神さまで、日本各地でスサノオは霊験あらたかな水の神さまとして信仰を集めています。そのスサノオの関係するところには、天王様とか弁天様とか、水の神、蛇の神という類いが実にたくさんあります。水への信仰です。ただ、それが水と美女と蛇という話になってくると、芸能の世界ではあの謡曲や歌舞伎の安珍・清姫のような女性の執念深さを描く物語になっています。

それに対して、先ほどの真姿の池。嘉承元年(八四八)、絶世の美女の玉造小町が不治の病を患い、苦しみました。そこで国分寺の薬師如来に三七日間祈りました。三七＝二十一日です。すると、童子が現れて「池の清水で洗いなさい」と言った。そこで、洗ってみたら、みるみるうちに殿舎の中に妙なる音楽が流れてきて、病気が癒えて、姫は元の美しい顔に戻りました。それで元の姿、真姿の池と言うのだそうです。奥ゆかしい伝説ですね。

現存する「医王山縁起」は江戸時代の写本ですが、原本は建武二年(一三三五)の作といわれています(図6)。それについては文献史料を専門とする歴史学者の方がしっかりと調べられるといいでしょう。きっといろいろなことがわかってくると思います。なぜかというと、建武二年と伝えているということは、要するに新田義貞が戦の最中に国分寺を焼き払ってしまったときのものだからです。その頃にはこの国分寺の薬師堂のところに、薬師如来が祀られていたということです。それは大変ご利益があるからと信仰されていたのでしょう。薬師信仰や観音信仰という日本古来の歴史の中で培われてきた自然信仰にも通じるような神仏への信仰なら、機会があったら拝みに行かれるといいと思います。民俗学で民間信仰とか民俗信仰の類いについて研究していると、各地の神仏の前では自然と手を合わせる習慣が身につきます。変

な宗教の特徴は献金と労力奉仕の強制です。お金を出せ、ただ働きをしろ、と一方的に勧誘するのは絶対にニセモノです。騙されないようにしましょう。



図６　医王山縁起（部分）

その由緒ある薬師堂は、多摩丘陵の崖線の上にあります。下に行くと国分寺の遺跡があります。覚えている方がおられるかどうか分かりませんが、昔、府中の東芝という大きな会社のボーナスが奪われた事件を知っていますか。三億円事件です。そのとき現金輸送車が乗り捨てられたのが、あの七重塔あたりだと、市史編さん室の方から聞きました。案内をしてくださった市史編さん室の依田亮一さんと宮川展夫さんにはお礼を申し上げます。

さて、次に姿見の池です。恋ヶ窪というけど、西武国分寺線の恋ヶ窪駅の辺りかなと思ったのですが、それにしてもおかしい、あの駅のあたりが恋ヶ窪であるわけはない。なぜか、何々が窪というのは、窪地でなければつけられない地名です。だから、杉並区荻窪とか新宿区大久保とか文京区の傾城が窪など、みんな水に恵まれた窪地です。民俗学を学んでいれば、何とか窪という地名を見れば、そこはもともと窪地で水が出るところだったなと思うのです。ところが、あの西武線の恋ヶ窪駅辺りは水が出ていません。本当の恋ヶ窪は今のJR西国分寺駅の、このいずみホールの北東側ですね。やはり、古代以来の

集落で、窪地で湧水があります。

国分寺市の自慢のもう一つが、西国分寺駅周辺は、まさに古代からずっと東西南北の交通の要衝だったという点です。しかも、現在も駅の近くに国分寺市の霞が関ともいえるような行政の施設が三つぐらい並んでいます。とくに市役所すぐ近くを南北に貫通している東山道武蔵路の遺跡は貴重です。そのすぐ近くには由緒正しい、あらゆる病気を治してくださる薬師様が薬師堂に安置されてあります。その崖下が武蔵国分寺跡です。何だったら、ちょっと歩いて三億円事件の車を隠した場所だというようなことも語り伝えて、歴史の話の硬軟さまざま取り交ぜて、すごい歴史が蓄積しているところだといっていいのではないでしょうか。七重塔の遺跡も近くにあります。こんなすごいところはなかなか他にはありません。

一〇．鎌倉幕府と比企郡の財力と武力

次に、畠山重忠の伝説ですが、まずその彼の本拠地は比企郡の、今は東松山市、嵐山（らんざん）、吉見、あの辺りです。あそこは秩父の山地を水源とする都幾川（ときがわ）という川が流れていて、その川の流域は古代から長く歴史を通じて豊富な稲や米を産出していたところです。ですから、あの辺りは縄文後期から弥生・古墳を経て律令制下まで続いた三ノ耕地（さんのこうち）遺跡、それから弥生時代から中世にまで続いた反町（そりまち）遺跡など、もうたくさんの遺跡があります。そこで生産される稲米の蓄積は有力者の台頭をもたらして古墳もたくさん築かれています。そうした歴史的な背景の中で、有力な武士たちの集団も生まれました。それが北武蔵という地域の特徴です。武家政権の所在地の名前から鎌倉幕府といいますが、鎌倉という場所は行ってみればわかるように、稲米の生産地でも何でもありません。政治と経済の中継点です。それを支えた財源・ファンドの有力な部分というのが、北武蔵の比企郡の稲作の基盤の上に築かれた経済力と武力でした。ところが比企能員（よしかず）とか畠山重忠たちが幕府をつくった最大の功労者であり、その他にも有力な上総介広常（かずさのすけひろつね）とか千葉介常胤（ちばのすけつねたね）がいたのですけれども、策略に長けた北条時政と政子と義時という親子が、前述のようにその有力者たちを殺していったわけですね。武家の貴種としての源頼朝を最大限に利用してです。でも、邪魔になれば、その源氏三代も消されてしまっています。『吾妻鏡（あずまかがみ）』は北条氏が自分た

ちの正当化のために後から作った歴史書です。さすがに、頼朝の死についてはほとんど書いてありません。歴史学者はそれを百もわかっていますから、古文書など年代と伝来の確かな記録史料をもとに、それらと比較しながら一生懸命に史実を追跡しています。

皆さん源頼朝は偉いと思っているかもしれませんけれども、あれは歴史の語りの中で、美化されているだけです。武将としては木曾義仲のほうがよっぽど武力に勝っていたと思います。『平家物語』など平安貴族たちの立場から書かれた記録では、義仲は困った乱暴者だと書かれているのです。頼朝なんか戦さに行ったことほとんどないです。挙兵のときは、行っただけで、石橋山の戦いで負けて、すぐに逃げてしまったのですから。それを日本史の教科書は、結果を重視して勝者を美化する癖があるのです。当時の記録でも、権力を握った者のことはあまり悪くは書きません。こわいから書けません。先ほどいいました聖武天皇と光明子の例でも、正倉院御物などで天平（てんぴょう）文化を誉めそやしますが、実際は政府の財源の中からお金を使いまくって、律令国家の財政を壊した張本人です。そういうことを言わないようにしようという優しい穏やかな人が、日本人の中には多いのです。でも、天平年間の約二〇年で、律令国家の財政の根幹は壊れていき、その結果どうなったかというと、先ほどもいいましたように、律令政府の後継者たちが公廨稲という新しい特別な税を作っていったのです。そうしてあまりにも重い課税で厳しい徴税を行ない農民たちを苦しめていった中で、自分の権益は自分の武力で守る、農民たちを上手に働かせる、という武士たちの自営の集団が台頭してくることになったのです。

一一．世のため、人のため

では次に、国分寺の近世についてみていきましょう。多摩地区の近世といえば、やはり玉川上水です。そしてそれを利用した川崎平右衛門たちによる大規模な新田開発です。それはいわゆる享保の改革の時期にあたります。八代将軍吉宗が就任したころ、江戸幕府の財政がボロボロになっていたのはなぜか。家康が元和二年（一六一六）に亡くなった時の遺産は金銀合わせて約一九三万四〇〇〇両もありました。御三家で分配しても幕府には約一九〇万両もあり、それが二代秀忠から三代

家光へと継承され、日光東照宮の造営に約五七万両を費やした家光の時代や、明暦三年（一六五七）の明暦の大火で幕府の御金蔵が焼け落ちた家綱の時代でも、幕府の財政はまだ比較的安定していました。しかし、藩の財政の窮迫していた舘林藩から入った綱吉の時代には、その反動のように歳出が増大化して幕府財政は急速に悪化していきました。度重なる諸大名家への御成りと華美な贈答、護国寺造営など放漫な財政支出が続いたからです。六代将軍家宣が甲府から入った時、年貢米や運上金による幕府収入から旗本と御家人の給与を差し引くと残りは約四七万両くらいしかなく、それに対して歳出の方は綱吉の最後の宝永六年（一七〇九）だけでも約一四〇万両にも膨らんでいたのです。一年だけで九〇万両もの赤字を出していたのです。

江戸幕府を壊したのは誰ですかというと、その一人、いや二人は、まさに綱吉とその生母桂昌院（けいしょういん）でしょう。それは数字の上からもよく分かります。二〇年もあれば、どんな堅固な財政も破綻させられるという例は、あの天平年間や、この元禄年間だけではありません。少し前になりましたけれども、最近のあの安倍政権下での黒田東彦総裁による一〇年間の日銀の異常な円安政策、マイナス金利、国債の大量買い入れなどもそうでした。二〇一一年に一ドル＝七五円台だった日本の円が、二〇二三年には一ドル＝一四〇円台にまで、その価値が半分近くに落ちてしまったのです。政治というのは一歩誤ればたいへんな悲劇を生むものです。ただ、その最中にはみんな気がつかないだけです。気がついても自分からは何もいわないのです。とばっちりがくるのがいやだから。歴史の中の伝承と変遷という動態を観察していれば、それらがよく分かります。江戸幕府の場合には、手遅れになる前に、そのような破綻に瀕（ひん）していた財政を紀州からやってきた吉宗が再建していこうとしました。

一方、江戸時代の前期から中期、その民政の上からみれば、玉川上水の開削はすごかったのです。伊奈忠治、伊奈忠克（ただかつ）、この人たちは多摩地域の恩人です。彼らが中心になって、まず玉川上水を作った。その工事を請け負ったのが玉川兄弟でした。これも歴史の教科書ではあまり教えないのは残念ですね。なぜ教えないかというと、当時のリアルデータが、古文書、記録がしっかりしてしないので歴史学が学術的に保証できる事実が不足してい

るからです。伝説ばかりだからです。それでも、玉川上水のおかげでどれだけ多摩地域が豊かになったか、大勢の人が住めるようになったか。国分寺市、小平市もそう、東久留米市もそう、全部そうです、あの辺りは。

私も昭島市に来る前は、東久留米市に何年か住んでいたので、そのとき文化財保護審議委員をさせていただいて、ちょうど高度経済成長期をはさんで大きく変わっていく多摩の農村地帯の民俗、農家の仕事や年中行事、麦踏みとか、富士講の行事など、昭和四〇年代後半に映画を撮っておいたのです。そうして生活史の資料として保存しておくことができたというのは、それなりにやっておいてよかったと今では思っています。だから、もし多摩地区の農村の変化を見たかったら、東久留米市の教育委員会に行って、「東久留米の年中行事」という映像記録をぜひ見たいと言ったら見せてもらえると思います。仕事も調査も研究も、できるときにやっておかなければ、映像での保存などできないですよね。なくなってしまったら終わりですから。

玉川上水の取水口は、最初は日野あたりで多摩川から水を引いたけれども全然駄目でした。もうちょっと上流に行って、福生から取ろうとしてもまた駄目だった。羽村まで上がっていった。すると、羽村からなら何とか通水できたといいます。その玉川上水はぜひ東京都をあげて、貴重な歴史遺産として保存すべきですね。

玉川上水の開削に次いで忘れてはならないのが、武蔵野新田の開発です。この開発に関わった川崎平右衛門は伝説的なすごい人です。彼は府中の押立村出身の人で、国分寺市内にも妙法寺の境内に記念碑があります（図7）。砂川から玉川上水の水を取って近隣へと引いて、開発していったのです。人手を使って何かする際は、手当を出して使うので、ただ働きじゃなかったのです。これが偉いところです。川崎平右衛門は、農村と農民のこ



図7　川崎平右衛門・伊奈半左衛門両代官の謝恩塔（妙法寺境内）

とをよく知っている人でしたからね。武蔵野新田を開発した川崎平右衛門のことは、府中市から『代官川崎平右衛門と武蔵野新田』（府中市郷土の森博物館　二〇一三）というブックレットが刊行されていますので、ぜひ読んでご覧になるといいと思います。

一二．明治以降の多摩地域の開発

さて、多摩地域が東京府になったのは、明治二六年（一八九三）からです。それまで多摩は神奈川県でした。当時、多摩地域には東京じゃ嫌だって言っている人たちがかなりいたのです。そのとき、もし神奈川県に残っていたら、今の国分寺市は半分ぐらい神奈川県になったかもしれません。しかし、東京府にとっては都市計画の上で玉川上水がどうしても必要でした。なぜなら、水源は命だからです。水は人間の生活を左右するからです。その頃、明治二二年には、新宿と八王子の間をつなぐ甲武鉄道が開通しました。それは後に国鉄の中央線になりました。多摩地区が大きく変わっていきました。

大正期に入ると、国分寺市域は別荘地となっていきました。今村別荘、これが日立製作所の中央研究所。江口別荘がのちに岩崎別荘となり、これが殿ヶ谷戸庭園です。これらの別荘は、いずれも貴重な水源地を確保しているわけです。そして、今村別荘は日立製作所の中央研究所となった後も、現在まで水源を守り続けています。だから、日立は年に二回、一般公開しているようです。それは大変いいことでしょう。それから、満鉄の副総裁だった江口定條（さだえ）の別荘だったのが、この殿ヶ谷戸庭園で、これは今は都立になっていますけれども。こういうものが自然を残してくれたというのもあるわけです。

あと、学園都市構想があったので、やたらこの周りに大学が多いのです。でも、それらは津田塾大学にしても一橋大学にしても、国立音楽大学にしてもみんな国分寺市域から出たところにできてしまっています。やっと市域に入っているのが東京経済大学です。ホテル・オークラでも知られる大倉喜八郎による設立ですね。でも、この一帯に学園を集中させたのは、あの西武の堤康次郎の学園都市構想でした。だから、今でも一橋学園駅みたいなのがありますね、西武線沿いに。おもしろいのは学芸大学駅です。その駅は東横線にありますけれど、そこには学芸大学はありません。戦前からの複数の師範学校を

母体として戦後の一九四九年に新制大学として設立されたのが東京学芸大学で、キャンパスは小金井市にあり、国分寺駅や武蔵小金井駅が最寄り駅ですね。

地名や施設の名前は、そのようによく歴史を語るもので、その他、民俗学の観点からみると、多摩という名前や多摩川と丹波山村（たばやまむら）との関係について、立川という地名はよく霊的なものが夢枕に立つというように何かの魂が立つ立河原、分倍河原や宿河原、多摩川というのは霊魂の川で、死者の霊魂だけでなく不気味な悪霊がやってくる、それは西北の方角からという古代の人たちの方位観に基づくという話、そのような日本人の西北不安の思想は、中国伝来の陰陽道による艮（うしとら）、東北方を鬼門とする方位観よりも古い日本列島の方位観であったという話など、柳田國男が「風位考」（『定本柳田國男集』第二〇巻 筑摩書房 一九八二）で説いていたような、地名が語る多摩の歴史の話もおもしろいかと思って、その話題ですこし盛り上げてから終わろうかなと思っていましたが（苦笑）、そこまでいかずに駄目でした。すみません。それにもかかわらずご清聴ありがとうございました。

司会　新谷先生、楽しい講演をありがとうございました。司会からで大変恐縮ですが、恋ヶ窪の姿見の池のお話がありました。恋ヶ窪には熊野神社がございます。また、道興准后（どうこうじゅごう）という室町時代の僧侶が恋ヶ窪に来たという記述が『廻国雑記（かいこくざっき）』という、彼の記した紀行文に残されています。道興は聖護院（しょうごいん）の門跡（もんぜき）であり、本山派修験（ほんざんはしゅげん）ということで、もしかすると何か熊野神社と関係があるのかなとも思いましたが、先生いかがでしょうか。

新谷　そうですね、熊野神社のお祭りですね。神社の祭りや立地というのは、それぞれの神社の個性・歴史をよく表しています。伊勢神宮は二〇年ごとの遷宮（せんぐう）ですね。それから出雲大社は毎年、神在月（かみありづき）、神無月（かんなづき）に海蛇の龍蛇（りゅうじゃ）様を日本海から迎えているのです。厳島神社では、ゴガラスサマと呼んでいる神聖なカラスを呼んで、御鳥喰（おとぐい）という神事、御島廻り式（おしまめぐりしき）をして、そのカラスに神饌（しんせん）のシトギ（粢）を食べてもらうのですね。つまり、それぞれの神社の古伝祭、神社オリジナルの古い祭りというのが各地の古い神社にはあるのです。獣の肉や血は駄目だというけれども、信州の諏訪大社では、鹿の肉を供えます。だから神社の存在意義とか個性というのは、それぞれの古い祭りに残されているのですね。近代の神社

祭祀では、どこでも出てくるような神饌、お神酒に塩や生米に水という生饌（せいせん）が一般的になっていますが、それはあくまでも略式で、本当は熟饌（じゅくせん）といってそのまま神様も食べられる神饌が古くからのものなのです。

一三、熊野信仰と多摩

そこで、道興准后ですけれども、彼は本山派修験の総本山である聖護院の門跡であり、熊野三山の検校（けんぎょう）も兼ねていた時期がある人物です。その熊野修験のトップが、文明一八年（一四八六）六月から翌一九年五月にかけて、北陸・関東・東北を廻ったの記録が『廻国雑記』です。京都が応仁の乱で荒廃する混乱の中で、彼は本山派修験の地方への教勢拡大をはかり、熊野三山の修験者たちとそのプロジェクトを進めたと推測されます。おそらく、それ以前から関東には熊野修験の御師たちの活動によってその影響が及んでおり、熊野神社をこの多摩地域一帯に広めたのも、その熊野の御師、修験者たちの活動によってだと思われます。その関係で恋ヶ窪の熊野神社にもその痕跡があるのだと思います。熊野三山の信仰というのは、山岳修験道、陰陽道、密教、神道などあらゆる日本の自然信仰も含めて合体させたような、いわば超ハイブリッド信仰です。「蟻（あり）の熊野詣で」とも言われたくらい、平安時代中後期には白河・鳥羽法皇をはじめ大勢の公卿（くぎょう）たちや庶民たちも含めてみんな争って参詣しており、その後も長く異様で強力な霊験力を発揮してきている日本を代表する不思議な神社であり信仰でもあるのです（新谷尚紀『神社とは何か』講談社現代新書 二〇二一）。

この恋ヶ窪の熊野神社の祭りを見てみると、恋ヶ窪は古い村ですけれども、神社は少し坂を上がったところに祀られていますね。それがまさに東山道武蔵路のちょうど横です。そこに熊野神社が立地しているのです。歴史的にとても大事な神社です。その熊野神社には、現在は天王社が合祀（ごうし）されています。その天王社というのは、この神社の氏子総代の鈴木さんという旧家の屋敷にあった天王社を移したものだそうです。その昔、夏の疫病がはやったとき、その天王様に祈願してそれを抑えてもらったと言い伝えています。天王社というのは祭神が牛頭（ごず）天王ですから、京都の祇園の八坂神社とか、名古屋の近くの津島天王社と同じような、要するに夏の疫病を抑えてもらえる厄除けの霊験あらたかな神様です。それが戦後

になって熊野神社に合祀されたというのです。戦前には恋ヶ窪に住んでいた行者さんがいたともいわれています。その行者というのは、要するに正式の免許を持っていないお坊さんのような、山伏のような人物で、江戸時代から明治、大正、昭和戦前期まで、日本各地にたくさんいました。新座市にもいましたし、東久留米市にもいました。

それで、今回市史編さん室の依田亮一さんと宮川展夫さんと一緒に、熊野神社にお参りにいきました。熊野神社の祭りには神輿の渡御があります（図8）。それはどこの祭りでも一緒です。ところが、この熊野神社の独特なものとは何か、それは火渡りをするという点です。その火渡りの火には藁を使っていました。藁の火というのは大変火力が強く、土佐のカツオの叩きも藁の強力な火力で一瞬に燃え上がらせて調理します。また、昔の農村の火葬でも、遺体をきれいに焼くために藁火が用いられていました。昔は土葬が多かったのですが、東北、北陸地方や中部地方、中国地方には古くから火葬の地域もありました。

熊野神社の藁火の火渡りは、すごく熱いということです。熱い火渡りで、心身を浄め、厄除け、厄払いの霊験を祈禱するのでした。昔はこの地域でも、修験者、行者さんたちが、錫杖を振りながら、お経を唱えて無病息災、村内安全を祈禱していたのでしょう。現在の熊野神社の祭りでは、氏子たちが神輿を担いで恋ヶ窪の家々をお祓いして回ります。暑い夏ですけれど、まあ秋に近いわけで、九月九日というと稲の収穫の祭りに近い頃で、これは夏祭りと秋祭りとが混ざっているようです。天王様は夏祭りです。それを九月九日の収穫祭に混ぜたのは、天王様の祭りを熊野神社の秋祭りに加えたからでしょう。

『江戸名所図会』の「恋ヶ窪」の場面には、先ほどの



図8　恋ヶ窪の祭りでおこなわれる火渡り
（出典：『国分寺市の民俗 五 ―本多新田・恋ヶ窪村の民俗―』国分寺市教育委員会文化財課、1995年）

道興准后が詠んだ歌が紹介されています（図９）。

恋ヶ窪といへる所にて　朽ち果てぬ　名のみ残れる
恋ヶ窪　今はた問うも　契ならずや

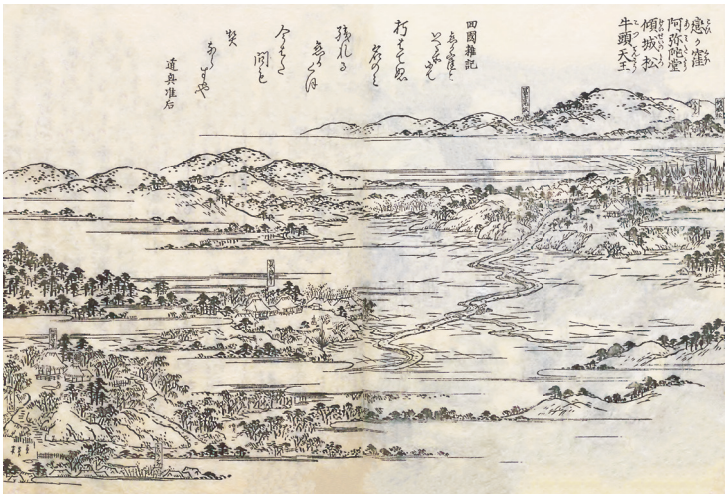


図９　恋ヶ窪（『江戸名所図会』国立公文書館所蔵）

一五世紀後半の文明年間にこの地を訪れた京都の高僧道興は、勇猛無比の坂東武者畠山重忠と土地の絶世の美女との悲恋の伝説をこの現地で聞いて、人の縁というのに心を動かされ、出家の身でありながら、煩悩の権化のような歌を詠んでいたのですね。それも人間臭くていいのではないでしょうか（笑）。

司会　ありがとうございました。それでは、質疑応答の方を終了させていただきたいと思います。先生ありがとうございました。

しんたに　たかのり　国立歴史民俗博物館　名誉教授

【開催情報】

国分寺市制施行六〇周年記念・市史編さん着手記念講演会

演　題：国分寺市のことをもっと知ろう
　　～歴史と民俗から～
日　時：令和七年一月一三日（日・祝）
会　場：いずみホール